

りきし おおすなぶんごろう
力士、大砂豊五郎

昔、大野原下木屋に中村豊五郎という人がいました。この人の先祖は、鎌倉時代の豪傑、鎌倉権五郎景政だといわれています。

権五郎の子孫は、摂津の国（今の大阪府の一部）に住んで、一万石の武将でしたが、戦国時代に大野原へ移ってきたようです。そこで、豊五郎の家は「津の国屋」と呼ばれていました。摂津の国から来た家という意味で、こういう屋郷がついたのでしょう。

大野原は江戸時代ころから相撲の盛んなところで、有名な力士が何人も出ています。辻の長田菊治郎という人は、投石と名のつて大関にまで進みました。（お墓は辻東の生木墓地にあります。）宮の下の薦田音吉という人と森半四郎という人は、それぞれ、淀川と二つ島という名で活躍しました。（二人のお墓は宮の下の角塚墓地にあります。）これらの人の中でも一番よく知られているのが中村豊五郎です。

豊五郎は、身長は一七〇センチくらいで、それほど背の高い人ではなかったようです。しかし、体の横幅はとても広く、床几の上に寝たら、床几の幅よりも広がったといわれています。まるで、衝立のようなからだつきだったのでしょう。少年の時から相撲がとても好きで、力が強く、仲間でかなう人はありませんでした。

そのころは、あちこちの神社で相撲大会が行われていました。豊五郎は、お宮の相撲があると聞くと必ず出かけて行き、いつも優勝していました。五番消しといって、かかってくる五人の相手を休みなしで続けて負かす離れ業も、たびたびやってのけました。もう、このあたりでは誰一人かなう人はありませんでした。

「ようし、ひとつ江戸へ行つて、わしの力をためてやろう。」

とうとう、豊五郎はこう決心しました。

大野原を出発して長い長い旅を続け、やっと江戸につきました。さっそく親方に弟子入りして、毎日毎日、ものすごい稽古に励みました。四股名（相撲取りとしての名前）も大砂と名のり、一段と力をつけました。そして、ついに、江戸でも一番強いといわれていた大関の西国茂右衛門と、晴れの土俵で勝負することになりました。

勝ちました。大砂豊五郎はみごとに大関西国に土をつけたのです。大砂の名前は江戸中にひびきました。ところが、負けた西国が大砂を憎み、その弟子たちと一緒に、折を見て豊五郎を殺そうと考えました。ある晩、夢の中で故郷大野原の氏神様である大野原八幡さまが現れ、大砂に、

「豊五郎よ、このまま江戸には命がない。十里（約四十キロメートル）四方は毒がまかれている。何も食べてはいけない。飲んでもしけない。早く江戸を離れなさい。」



とおっしゃいました。

ありがたい神様のお告げを聞いた豊五郎は、大急ぎで江戸を発ち大野原に帰ってきました。そして、元の百姓になり、農業に精出していました。

何十日かたちまりました。豊五郎の命を奪おうと、西国の手下が数人、はるばる江戸から大野原にやって来ました。十三塚から残水と豊五郎の家をたずねながら下木屋まで来ました。道ばたの田んぼで、一人の男が牛を使って田を耕していました。西国の手下の一人がその男に、

「おいおい、大砂豊五郎の家はどこだ。」

とたずねました。男は牛をとめて、家をたずねた男の方を振り向くと、いきなり、手にしていた重い牛鍬（牛に引かせて田を掘り耕す大きな道具）を軽々と持ち上げて、それで方向を示しながら、

「豊五郎んところは、あつちじや。」

と教えました。西国の手下たちは、目をまるくしておどろきました。そして、顔を

寄せ合よって小聲ここえで、

「この辺へんでは、ただの百姓ひやくしやうでさえあんなすごい力ちから持ちなのだから、大砂豊五郎おおすなぶんごろうの力ちからはどれほどかわからない。もし見みつかったらたいへんなことになる。」

と、ふるえあがりながら口々くちぐちに言いいました。そして、何なにやらひそひそ相談そうだんをしていたかと思おもうと、もと来たき十三塚じゅうさんづかの方ほうに向むかって、逃にげるように立たち去さりました。

牛うしを使つかっていた男おとこはこれを見みて、にんまりと笑わらいました。この男おとこが、大砂豊五郎おおすなぶんごろうだったのです。

豊五郎ぶんごろうは、約二五〇年前てんめいの天明三年ねん（二七八三）六月がつになくなりました。そのお墓はかは、風化ふうか（岩いわや石いしが雨風あめかぜなどでくずれ、もろくなる）していますが、下木屋しもぎやの県道けんどうから少すこし入はいった所ところにあります。

〈大平清秀〉

『ふるさとむかしむかし』大野原町より